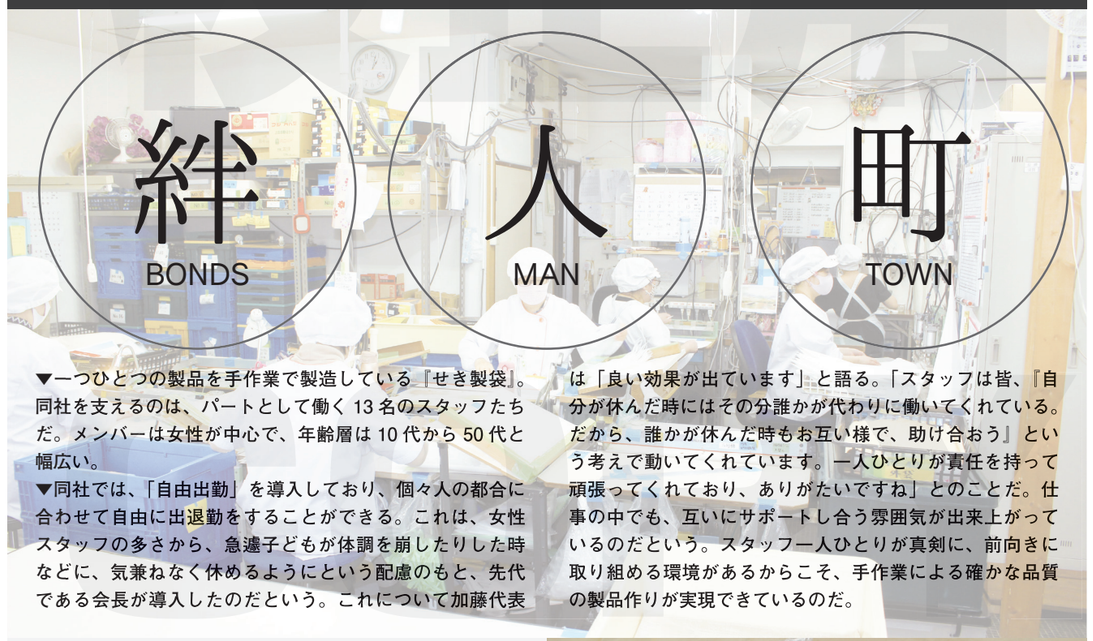
心を込めた手作業で作る絞り袋をたくさんの人に届けたい



▼一つひとつの製品を手作業で製造している『せき製袋』。同社を支えるのは、パートとして働く13名のスタッフたちだ。メンバーは女性が中心で、年齢層は10代から50代と幅広い。

▼同社では、「自由出勤」を導入しており、個々人の都合に合わせて自由に出退勤をすることができる。これは、女性スタッフの多さから、急遽子どもが体調を崩したりした時などに、気兼ねなく休めるようにという配慮のもと、先代である会長が導入したのだという。これについて加藤代表は「良い効果が出ています」と語る。「スタッフは皆、『自分が休んだ時にはその分誰かが代わりに働いてくれている。だから、誰かが休んだ時もお互い様で、助け合おう』という考えで動いてくれています。一人ひとりが責任を持って頑張ってくれており、ありがたいですね」とのことだ。仕事の中でも、互いにサポートし合う雰囲気が出来上がっているのだという。スタッフ一人ひとりが真剣に、前向きに取り組める環境があるからこそ、手作業による確かな品質の製品作りが実現できているのだ。

株式会社 せき製袋

SEKI

Decoration Bags

東京都荒川区町屋6丁目4番13号

URL：http://www.sekiseitai.jp/

心

MESSAGE

SEKI

Decorating Bags

創業以来、絞り袋を中心に製造を続けている『せき製袋』。製品は一つひとつすべて手作業で作られており、その確かな品質で、多くのお客様から信頼を得ている。本日は、そんな同社の二代目である加藤代表に、竹原慎二氏がお話を伺った。

代表取締役　社長

加藤 大博

――『せき製袋』さんは、長く続く会社でいらっしゃるとか。

創業以来、絞り袋を中心に製菓用品を作り続けてきまして、2020年には法人化を果たしました。もともとは、祖母と祖母の妹夫婦が経営していたのですが、祖母は90歳を超え、現在会長である先代も80歳を超えましたので、私が二代目として引き継ぐこととなったのです。

――絞り袋と言いますと、お菓子作りで使用されるものでしょうか。

ええ。生クリームなどをはじめ、最近ではお寿司のわさびやねぎトロなどを絞るためにも使用されていますね。様々な素材やサイズを展開しているので、用途に合わせてお選びいただけます。他にも、中身を出すことなく簡単に口金の交換ができる製菓用調理器具「copli（カプリ）」も製造しています。丈夫で高品質なものを提供したい、という思いから、一つひとつ手作業で丁寧に作っているのです。

――すべて手作業ですか！　それは大変でしょう。

大変ですし、価格も上がりますが、品質について妥協したくないのです。以前、ちょうどバレンタインの時期に東京にあるかっぱ橋道具街に足を運んだことがありました。そこで絞り袋を購入している母子の姿を見た時に、二人が心からお菓子作りを楽しみにしていることが伝わってきたのです。もしかしたら、お子さんが初めてお父さんにバレンタインのお菓子を作ってあげようとしていたのかもしれません。そんな思いで買った絞り袋が、万が一でも作っている途中で破れてしまったら……。私たちにとっては何百枚と作るうちの一枚かもしれませんが、お客様にとってはたった一枚です。お客様に悲しい思いをさせないためにも、完璧な絞り袋を作ってあげたいのです。

――実際に手に取るお客様を思ってのこだわりなのですね。

ところが、かつて工場内には検品ラインがなく、月に50枚ほど不良品があったのです。これは何とかしなければ思い検品ラインを増やそうとしたのですが、小さな町工場ですし、潤沢な資金があるわけでもなく、なかなか難しいのが現状でした。それならばと、夜工場に残り、私一人で検品作業をしていたのです。すると、不良品の数が着実に減っていきまして。それを数字データとして提示して、社内で協議を重ねて、ついに工程に検品ラインを入れることになりました。今では、不良品は年間で数枚ほどにまで減っています。

――それは素晴らしいですね！　代表は情熱を持って、この仕事に取り組んでいらっしゃるようだ。

実は、もともとそこまで積極的に携わろうとは思っていなかったのです。私は、高校卒業後にアメリカ・シカゴへの語学留学を経て、『埼玉大学』の夜間主コースに入学しました。しかし、いざ就職活動の時期はリーマン・ショックの影響で就職氷河期。そんな折、会長に声をかけられて、こちらでお世話になることになったのです。ただ、会長には申し訳ないのですが、最初の一年はずっと同じ作業を続けるのが苦痛で（笑）。正直、嫌だと思いながら仕事をしていたのですが、一年ほど経つと仕事への愛着が湧いてきて、もっと良いものを提供したい、と思うようになったのです。そして、自分から外回りの営業に出るようにもなりました。

――声をかけた若者が成長されて、会長も喜ばれたのではないでしょうか。

いえいえ、私こそ、代替わりをした今でも会長には助けられています。三年ほど前に代替わり後、会長は完全に前線からは身を引き、私にすべて任せてくれています。それでも、何か相談をすればアドバイスをしていただけますし、とても心強いですね。また、当社の製品を卸している問屋さんにも、「しばらくは安泰だ」と言っていただけますし、時に「こんな製品作れませんか」とご提案いただけることもあります。つくづく、たくさんの人に助けられていることを実感する日々です。

――代表の誠実なお人柄あってこそだと思いますよ。最後に、今後についてお聞かせ下さい。

メイドインジャパンの高品質な製品を、世界に広げていきたいです。今、タイをはじめとした東南アジア諸国は経済成長が著しく、洋菓子作りも人気が出ています。まずはそちらに輸出していけるように、事業展開を進めていきたいですね。

（2020年12月取材）

竹原 慎二

（元WBA世界ミドル級チャンピオン）

加藤代表は、知人のパティシエさんに、『せき製袋』の絞り袋を使ってもらい、意見をもらっているそうです。対談でお話しされるお姿からも、事業に対する熱い思いを感じて、思わず聞き入ってしまうほどでした。これからもそんな代表のままでいて下さいね。応援しています！